

旧約単篇 列王記の福音

エリシャの不思議な奇跡

列王記下 6 : 1-7, 2 : 19-25

預言者エリシャの働きを記した列王記の前半を読み通しての印象と感想は、余りにも桁外れの奇跡物語に満ちていることです。これはエリヤ物語以上の激しさを感じます。どうして、これだけの途方もない超自然的怪力の記録が保存されたのか……。その一つ一つにどんな必然性があったのか……。読者は解釈上の疑問に捕らえられて、戸惑うのです。

研究者の中でも、ケンブリッジ旧約注解の J.ロビンソンなどは、正直に次のように疑問を隠しません。「現代の多くの読者にとって、それらは困惑と当惑の原因となっている。というのは、それらが神の代理者と言われる一人の人間が道義的に嫌悪の情を起こさせるような仕方で行為する、そういう人間を描いているからである。」ロビンソンは非常にドライと言うか、これらの奇跡物語を通俗的な民間説話として片付ける訳ですが、彼によれば、編集者は、真実の宗教のために偽りの宗教と戦う預言者の勝利を記そうとするあまり「その人物描写の質を下げているのである」と言うのですね。結局、列王記の中心思想さえ読み取ることができれば、奇跡の部分は無理して解釈しなくても、捨てれば良いということになります。こういう考えの人もいます。

私自身は決して中世の人間でもないし、古代人の頭を持つ者でもないのですけれど、この流儀で聖書を読むと、最終的には自分の科学的納得の枠内に納まるもの以外は全部、神話として無視するか、ないしは信仰的善意の脚色として捨てることになります。それで良いのだと言う人も多いですが、どこで線を引くかについては、そう言う人たちもまちまちで、結局自分自身の我慢できる限度という「いいかげん」なものを、線引きの尺度にしています。

私自身はこういう extraordinary な奇跡の記事も、私たちの思い込みとか不必要な拒絶反応を整理して、その時点での主の意図への謙遜な洞察眼を持てれば、信仰の目で見直すことができるものだと考えます。そういう実例として、今夜は6章と2章から三つの奇跡を取り上げてみました。

1. 主の名による助けと祝福。

a. 鉄の斧を浮き上がらせる。 6:1-7.

1. 預言者の仲間たちがエリシャに言った。「御覧のように、わたしたちがあなたと共に住んでいるこの場所は、わたしたちには狭すぎます。2. ヨルダンに行き、梁にする材木を各自一本ずつ取って来て、わたしたちの住む場所を造りましょう。」エリシャは、「行きなさい」と言った。3. 一人が、「どうぞあなたもわたしたちと一緒に来てください」と頼んだので、「わたしも行こう」と言って、4. エリシャも彼らと共に行った。彼らはヨルダンに来て、木を切り出した。5. そのうちの一人が梁にする木を切り倒しているとき、鉄の斧が水の中に落ちてしまった。彼は、「ああ、御主人よ、あれは借り物なのです」と叫んだ。6. 神の人は、「どこに落ちたのか」と尋ね、その場所が示されると、枝を切り取ってそこに投げた。すると鉄の斧が浮き上がった。7. 「拾い上げよ」と言われて、その人は手を伸ばし、それを取った。

エリシャの中に主なる神が生きて働いているショックを、若い預言者たちに与えて、肝に銘じさせるために主がなさった御業です。同時に、斧を借りて来たその人に責任を果たさせるため、神の言葉の権威にかけても、代わりの斧ではなく元のを返させたのでしょう。ここは6節末尾「すると鉄の斧が浮き上がった」に重点が置かれていますから、やはり重力に抗する異常な力が働いたと見るべきでしょう。

ところで、ユダヤ人のラビたちの中には、ここでエリシャが正確な場所を確認してから、そこを目掛けて枝を投げ込んだことにこだわっている人もい

ます。キムヒーという人は、このときエリシャがなげたのはただの細い「枝」ではなく、(אֵז は木ですが) 斧の柄を木で作って、柄の先を精密に斧の穴に合わせて削ったと言うのですね。それをエイッと投げると、正確に鉄の穴に突き刺さって、斧は柄について浮き上がったと言うのです。文字どおり鉄の斧の穴を穿った訳ですが、また文字どおり「穿ち過ぎ」の感もあります。柄の方が起き上がって水面に浮いたと言うのでしょうか。ともあれ、古代のラビたち彼らなりに解釈の努力をしていることが分かります。解釈者は生ける神の手が働くとき、鉄斧の頭が上がって来ること自体は疑わなかったのですが、なぜ木をその正確な地点に投げたのか、細目のつながりや必然性を何とか見ようと努力しているのですね。最後に、本人に拾わせているのは、これが幻でも錯覚でもなくて、正しくその元の斧の頭であることを確かめさせるためだと思います。

もちろん、分からない部分もあります。でもやはり、この記事はこのままに受け止めるほうが自然なように、私には思えます。この時まさにこの人を通して、生ける神が力を現しておられた。それはエリヤの時と同じ神の指であった。もしそれを見る目を持つなら、この人エリシャが語る言葉が聖なる神の意志であることは心ある人には見抜けた……と。

b. 汚染された水源を清める。 2 : 19-22.

19. この町の人々はエリシャのところに来て、「御覧のように、この町は住むには良いのですが、水が悪く、土地は不毛です」と訴えた。 20. 彼は、「新しい器を持って来て、それに塩を入れなさい」と命じた。人々が持って来ると、 21. 彼は水の源に出かけて行って塩を投げ込み、「主はこう言われる。『わたしはこの水を清めた。もはやここから死も不毛も起こらない』」と言った。 22. エリシャの告げた言葉のとおり、水は清くなって今日に至っている。

この2行目の「水が悪く、土地は不毛です」というところ、以前の訳です

と「水が悪いので、この地は流産を起こすのです」となっていました。この方が直訳で、メシャッカーレト מִשְׁקָלֵת は、「早産する」とか「妊娠しない」という意味で、普通は人間について言う言葉です。ここではしかし、「この地が」流産する……と言うのです。これは「作物が実らない」ことを指すのだと見る人「家畜が早産する」意味であろうと見る人。その理由は、人間なら自由に外の水源を利用するだろうから……という訳です。また全部含めて「婦人は流産、家畜も早産、作物や果実は実る前に落ちる」と解説しているものもあります。新共同訳は「この地は」に重点を見て、「不毛です」と、作物が実らない意味に取っています。もちろん、ベテルの水源が全部そうであれば人は住まないでしょうから、これはベテルの一区画……この泉の水が潤す区域に限られたと見て宜しいでしょうか。

エリシャが投じた塩には泉の水質を変える作用は無いだというので、この記事を疑問視する向きもあります。しかしエリシャは決して、水道局が活性炭素を入れるような意味で塩を投じたのではなくて、旧約聖書の中でもしばしば清めのシンボルに使われている塩を、象徴的に使っているのだと思います。塩が清めるのではなく、主なる神が水質をお変えになる。有害物を含まないきれいな水にお作りになる。それをエリシャは、「主はこう言われる」 כֹּה־אָמַר יְהוָה という宣言で証しします。塩は「神が今お清めになる！」ということの信号かサインのように使われていると見て良いでしょう。

命を支えるきれいな水は、主なる神のみが作ってお与えになる。その神のみに属する力が、神の人エリシャを通して働いていることを見て、ベテルの住民は畏れをもって神の言葉を聞くのです。これはナザレやカペナウムで主がなされた奇跡の趣旨ともつながります。ところで、この後に続く記事は、読み方によっては少なからぬ抵抗を感じさせるのですが……。

2. 主の名による呪いと結果。 2 : 23-25.

23. エリシャはそこからベテルに上った。彼が道を上って行くと、町から小さい子供たちが出て来て彼を嘲り、「はげ頭、上って行け。はげ頭、上って行け」と言った。 24. エリシャが振り向いてにらみつけ、主の名によって彼らを呪うと、森の中から二頭の熊が現れ、子供たちのうちの四十二人を引き裂いた。 25. エリシャはそこからカルメル山に行き、そこからサマリアに帰った。

この記事は昔から、随分多くの人に疑問を感じさせたようです。なぜだろう？ どう解釈すれば、列王記の信仰のメッセージと調和してつじつまが合うのだろうか？ 真面目な聖書解釈者であればあるほど、真剣に考えあぐねたのです。

もっとも、ロビンソンのように、ここでは神は「憐れみ深い父というよりは、むしろ残酷な暴君である」と極言する人もいます。少なくともこの記事は「霊性の強い最良の申命記伝承をはるかに下回っている」と彼は評価するのです。編集者は程度の低い民話を取り入れてでも、「真の預言者に服せよ」ということをたたき込んだのだと。

しかし他方、これをこのまま真っすぐに受け止めようとした人たちは、何とかして自分の拒否反応と先入観を修正して、納得の行くかたちで列王記のメッセージの文脈で消化しようと、いろいろ努力をしました。その中には当たらないものもあるでしょうが妥当な反省や正確な分析もあります。私たちがいくつかのヒントをそこから得ることができると思います。

《 那一 》 熊は子供たちを皆殺しにしたのではなく、24 節は「引き裂いた」 וַתִּכְרַעְנֵהּ と書いてあるのは、怪我をさせて痛い教訓を子供たちに与えたのである、と説明します。それ位の無礼で子供たちが惨殺される筈はない… …という善意から出た文意の和らげです。でも、熊が「引き裂いた」と言からは、軽い引っ掻き傷で済んだとは考えられないでしょう。三才児の喧嘩

ではないのです。この表現の感じはやはり、少なくとも「死傷者 42 人」という所でしょう。

《 その二 》 「はげ頭」の解釈を修正しようとした人もいました。「はげ頭、上って行け」 עָלָה קָרַח の קָרַח が「はげ頭」ですが……。これはエリシャの肉体的なハンデをからかったいたずらじゃない。これは預言者と知りながら、預言者としてのエリシャを侮辱したものであろう、と言うのです。多分、少年たちはエリシャの服装からエリシャを預言者と認めたのに違いない。「はげ」と言うのは預言者の剃髪を知っていたからで、頭巾かターバンで蔽われた頭を指さしながら、「知ってるぞ。お前の頭巾の下はハゲだろう。このクソ預言者のド預言者め、正体見破ったぞ！」……それがこの「アレー・ケレーアハ」だろう、と言うのです。

彼らが神の預言者を嘲笑したということは取りも直さず、神御自身を嘲笑したのである。その不敬虔の上に神の怒りが下った。この「預言者は当時剃髪していた」という所は十分に立証できないのですけれども、この人たちの罪というのが、単に差別用語を使ったことではなくて、神の言葉への「ノー」、神の啓示への拒絶であった……ということは言えるでしょうね。今やエリヤを継いで地上で神を代表する神の名代を否定して、敢えて侮辱したのだとすれば、ちょうどイエスをベルゼブル扱いしたファリサイ人の罪を先取りしたことになります。

《 その三 》 「はげ頭、上って行け」の「上って行け」 עָלָה についてです。これは山道を旅して行く意味ではなく、天に上ることへの暗示だということです。つまり、ベテルに上る預言者に対して「ハゲのオッサン、しっかり行け行け」と囃し立てたのではなくて、「オジン、お前エリヤの真似できるか。できたら、やってみい」という侮蔑的チャレンジであつた、と。これは、本当にこの「上って行け」にそういう意味を込めたかどうか、私は断言できないように思いますけれど、もしそうだとすれば、「エリヤ様は偉かったが、

おまえ様は比べものにならない」という、頭からの否定と侮辱だったことになります。

《 その四 》 「小さい子供たちが出て来て」というその「小さい子供」がどれくらい「小さ」かったかについてです。これは、日本語訳や古い英語訳から想像されるような「幼児」ではなかったのではないかと。少なくとも幼稚園児の年齢ではないと思うのです。原語は **וְנַעֲרִים קְטַנִּים** ですが、「子供」と訳してある語は「若者」「青年」まで含む広い意味を持ちます。これまでの訳文は「小さい」という形容詞に幻惑されて、幼児と推測したのですが、この「小さい」は「若い」「未熟」「取るに足りない」意味の「小さい」ではないか……？ つまり「チンピラ」です。

ソロモンは幼稚園時代ではなく、エジプトから妻を迎えてからという20代とは言いませんが、どんなに若くても17～18でしょうが、「わが神、主よ、……………私は **וְנַעֲר קָטָן** に過ぎません」と言っております（王上3:7）。「取るに足りない若者」と新共同訳は訳していますが、俗語で感じを出してみれば「主よ、私はまだガキに過ぎません」となりますか。とすると、ここは「町からガキどもが出て来て」と訳したほうが良いのではないかと……。この時エリシャはチンピラどもに取り巻かれたのです。

イスラエルのチンピラは知りませんが、ギリシャのチンピラなら私も経験して知っています。私の場合、「振り向いてにらみつけ」る勇気はなかったし、それに熊も出ませんでしたけれどちょっとばかりコワかった。アテネ市内リカヴィトスの下宿の近くに、あまり程度の良くない私立中学と高校がありまして、夕方など十数人の悪童どもと擦れ違ふことはよくありました。「こーら、中国人チンチンチンのチョンチョンチョンめ」って言うのですが。この「チンチンチン」と言いますのは、中国語の響きの特徴と言いますか……「今天晚上来吃中国菜 ba」というような響きがギリシャ人が聞くと「チンチンチョンチョン……」に聞こえるのです。差別用語ですけど、品の悪

い所へ我々が行くと、必ず言われます。毛さんなんかもやはり、行けば言われるでしょうね。

「私は中国人じゃないぞ」と言えばいいのですが、言いませんでした。大人げない、ということもありますが、それより、ちょっと気味悪かったことも事実です。何をされるか分からない。大阪では天王寺の境内で浮浪者の老人を殴り殺したりして遊ぶ手合いがいます。そのギリシャの中学生も、一度だけは正直言ってコワかった。エリシャの場合はそれが四十数人……神を恐れぬチンピラの群れです。ここはやはり幼稚園児が「ハゲのオッサン、行け行け」と言ったのではなく、天王寺を徘徊するような手合いがサッと取り巻いて、「こら、ハゲ」と凄んだのでしよう。

以上のことを考慮しますと、この事件を記録する列王記の記事から感じる不可解さとか、拒絶反応は、読者の側での正確な状況理解の不足、それに文章や語句の解釈の不十分から来ておると考えて良いでしょう。神を恐れぬ肉の人間、神の言葉を無視しようとする高ぶる新人類の上にこの時、裁きが下されたのです。

《 その五 》 「主の名によって彼らを呪った」という「呪った」の意味内容です。これは「死ね！」と言ったのではないでしょうね。「主はこう言われる。お前たちの上に災いは下る！」恐らくエリヤはそう言ったのでしようけれど、そのあと何が起こるかは知らなかったと見るべきでしょう。それはエリシャの関わることではなく、主なる神がなさることでした。聖なる神御自身の手には歴史のすべてが握られていました。エリヤは神に委ねたのです。

このあたり、使徒行伝5章のアナニアとサフィラの死とよく似ています。アナニアの場合もそうでしたが、「主の言葉を無視して侮辱することは許されない」こと、その神の言葉はエリシャの中にあることを、最も明瞭でショッキングな形で示すことが、この場合天の父の意志であったと、受け止めて

良いでしょう。

《 結びの感想 》

主として最後のエピソードからです。ベテルのチンピラどもに囲まれたとき、エリシャが私ほどビビったということもないでしょうが……。それでも、数十人の無頼の徒に突然囲まれれば、神の人とても身に危険を感じなかったとは言えないでしょう。しかし神の人は支えられていたのです。「見よ、わたしの僕、わたしが支える者を」という御言葉がイザヤ書に(42:1)あります。この日エリシャは、主から与えられた使命がある限り、主は私に委ねた言葉を支えていて下さるのだという信仰を新たにしましたでしょう。

もう一つはベテルの住民の受けたショックですが、神が本当にメッセージを委ねた器を、人は侮辱することを許されない。仮に未熟と無分別から出た無礼であっても、神ご自身への侮辱と同じ裁きに遭わねばならない！ 恐らくその日から、ベテルの人たちは謙遜にさせられて、神の言葉への畏れを持ったでしょう。

もう一つの感想は、皆さんが次に想像なさることとは違うかも知れませんが……。 「福音の務めをする私に対するとき、エリシャを前にしたベテルの人と同じ畏れを持てよ……」 というような確信を私はおよそ持っていない、ということです。それは多分、自ら顧みて主の器としてのお粗末さを知るからでもあります、もう一つの理由はまるでエリシャ気取りの、権威主義の牧師を今までに何人も見てしまったことからの **reaction**——反作用です。人が私に「はげ頭、上って行け」と言うとき、私はやはり「そう言えばワシは、どこから見てもはげ頭やなァ」と、先に感心してしまいます。「はげ頭言われるん無理ないワ。」特に髪の毛のことでなくて、自分の欠陥や自分の無力についてです。ですから、どうか遠慮せずに、「はげ」だと思う時は「はげ」と言って下さい。私も喜んで受けたいし、それに、熊も出ないと思いま

すよ。

(1989/01/08)

《研究者のための注》

1.4:38-41 に「飢饉のギルガルでのうりの煮物」の記事があります。エリシャが投げ入れた「麦粉」は2:21の塩に見られるような「清め」の象徴的意味を持たないのですが、ここでは日常食品として最も安全で健康的な食品が、「有害物を無害にし、安心して食べられるものにする」主の御業のシンボルとして使われているのでしょう。この野生のうりは下剤にも使われたものらしく、大量を食用にすることはやはり有害であったろうとは **Snaitth** の説明です。これは心理的に安心させただけで奇跡ではないとするロビンソンの見方は、この出来事を記録した列王記記者の意図を十分に説明できないと思います。